

第五章

ビオレンシアの
悪魔払い

本書を書く必要を感じた一番の動機は、これまで述べてきたようなコロンビアにとり憑いている固定観念の誤った部分を是正して、正しく認識していただくことであった。改めてその固定観念を描写すれば、コロンビアは、テロ・誘拐・麻薬・ゲリラなどにより治安の極めて悪い国であり、凶悪な犯罪が多く、またコロンビア人は国民性として犯罪の傾向が強く、それらが歴史的に継続し文化として染み付いているといった内容になるように思われる。

このような固定観念は、我が国で出版されている書物に共通しているが、コロンビアで生活をしてみて客観的な犯罪や事件は別としてコロンビアの国民性にとり憑いている非寛容性や暴力性については、どうしても納得できないものであった。私の想像であるが、実際にコロンビアに住んで、コロンビア人と親しく交際したり、ビジネスを行ったことがある人で、コロンビア人を凶暴であると感じ、それを書物に書いた人はいないのではないかと思う。では何故日本で出版されている書物において、同じようなコロンビアの誤ったイメージが描かれているのだろうか。この問題については、コロンビアの歴史家や知識人の書いた文献を読んでみて、コロンビア人自身が作り出したものであることがわかった。

エドゥアルド・ポサーダ・カルボは、コロンビアの学界、マスコミおよび知識人がコロ

ンビアを「殺人国家」として描写している事例を詳細に検証し、その代表例のひとつとして、ウリベ政権の大統領府和平委員会のルイス・カルロス・レストレポ高等弁務官の著書『テロのその先—コロンビアにおけるビオレンシアの文化的衝突』（二〇〇二年）を引用している（Posada, pp.90-92）。

レストレポによれば、「われわれ（コロンビア人）は、お互いに殺しあうためのパーティーを開いている」、「恐らく、われわれが生きていくのかどうかを、（中略）殺人行為の陶酔のなかに何らかのアイデンティティを掴むことができるのかどうかを知るために殺す」、コロンビアを理解するためには「すべてのコロンビア人が自分自身のなかに持っている、刺客性を理解しなければならぬ」、現在われわれが苦しんでいるビオレンシアは、「多くの未終結の戦争が積み重なり、堆積した所産である」、ラ・ビオレンシアは、「多くのコロンビア人にとって、習慣となり、また生活スタイルとなった」、ビオレンシアの継続は、「一世紀以上の非寛容」により孵化させられたものである。

このようにレストレポは、個々の犯罪を「ビオレンシア」という抽象概念に転化し、個々の犯罪者の動機などを捨象して、つまり「私」という個人の犯罪ではなく、「われわれ」というコロンビア国民の犯罪として、かつそれをコロンビア人の国民性として描写してい

る。

また、ポサーダは、後世の知識人に影響を与えた人物としてアルベルト・ジェラス・カマルゴ元大統領（一九四五年～一九四六年、一九五八年～一九六二年（国民戦線協定第一次）在職）を挙げている（Posada, p.49）。ジェラスはその回顧録のなかで、「子どもの頃の記憶のなかで、戦争は重要な位置を占めている」、「戦争は、人々の大いなる娯楽であり、パーティーであり、また最高のスポーツであった」と述べ、戦争を「最も真の国民的な事柄」であったと規定している。

さらに、ポサーダは、コロンビアの知識人のなかで世界的に大きな影響力のある人物として、ノーベル文学賞を受賞したガブリエル・ガルシア・マルケスを挙げている。ガルシア・マルケスは、一九四〇年代後半のラ・ビオレンシアについて、「スペインからの独立以来この国がすっかり陥ったあの市民戦争と同じ危機に転落し始めた」と表明して、一九世紀の内戦が終了しないまま二〇世紀後半まで持ち越されているという認識を示した。また、ガルシア・マルケスは、『生きて、語り伝える』のなかで、「当時からすでにコロンビア人はいろんな理由をつけて殺しあってきたものであり、殺しあうために理由を捏造する場合もままあったのだ」（五二九頁）と書いている。また、先に述べたようにガルシア・

マルケスにとって暴力小説は国民性の正当な文学的激白であり、『百年の孤独』において一九二八年のいわゆる「シエナガの大虐殺」と呼ばれる事件を取り上げるなど、様々な暴力事件を取り上げている。これが「コロンビアのビオレンシア小説家」と呼ばれる所以である。

このようなコロンビアの歴史家および知識人の傾向を理解するためには、一九六〇年代以降のキューバ革命の政治的影響のもとで、知識人の間にチェ・ゲバラやマルクス・レーニン主義思想への共感が広まったことの重要性を認識する必要がある (Posada, pp.234-235)。すなわち、これまでのコロンビアの歴史は寡頭支配層による権威主義的非寛容により支配され、その対立を話し合いにより解決することはできず、武力による革命で打ち破るしかないという暴力革命を正当化する風潮である。このような風潮のなかで、コロンビアの知識人はビオレンシアを貧困と格差という社会経済構造を踏まえ、寡頭支配層に対する貧困者層の反抗という階級闘争史観と、コロンビア国民の暴力性という文化人類学観とを混合させた歴史解釈で説明しようとした。

また、このような政治思想に関係のない多くの知識人がコロンビアのビオレンシアについて、それがコロンビア人の国民性に特有のものであり、忌避すべきものと述べているの

は、暴力的傾向の対極にある知識人にとって、同胞の暴力的行動や残虐な行為の動機や意図が理解できないが故に、またそれを許せないという気持ちから、自嘲的に「非寛容性、暴力性」という曖昧な文化的要因に逃げ込んだように思われる。コロンビア知識人の知的水準の高さが、このような忌わしい自国の歴史の負の側面を他の外的要因のせいにはせず自国の国民性の負の側面に帰着させたのではないか。このような思考方法は、負の側面を自国の問題に帰する日本人と似た面があるように思えてならない。他のラテンアメリカ諸国で、しかもコロンビアよりも内戦や革命が頻発した国で、その原因を自分の国の国民性の問題であると規定した知識人層を持っている例を聞いたことがない。

我が国で出版されているコロンビアに関する本が、例外なくコロンビアのビオレンシアを階級闘争史観と文化人類学的国民性説に基づいて説明している理由が、このようなコロンビアの特異性にあると考える。

他方で、外国の研究者の関心が他のラテンアメリカ諸国と比較してコロンビアについて相対的に低く、公平にコロンビアを評価し分析する著作が少ないことも固定観念が定着した要因のひとつであると思われる。

デイビット・ブッシュネルはその理由として、第一に、外国の研究者にとってコロンビ

アのビオレンシアの歴史が持つ研究対象としてのマイナスイメージを、第二に、コロンビアが伝統的にラテンアメリカ諸国を議論する際に用いるモデルに合致しない特異な国であることを指摘している (Bushnell, p.16)。また、前述のエドゥアルド・ポサーダは、コロンビアの学界および知識人のマルクス・レーニン主義的傾向が外国の研究者に忌避されたと示唆している (Posada, p.10, p.246)。

大使公邸にコロンビアの政官産学各界の要人を日本食の夕食会に招いて、人脈を構築したり、情報を収集することは、大使の重要な仕事であった。そういう機会に、話題のひとつとして、私がコロンビア人について抱いている温和で善良な印象にもかかわらず、何故コロンビアにはビオレンシアの歴史があり、また、残忍な事件が多いのかという質問を必ず出して意見を伺った。

詳しく統計をとったわけではないが、筆者の質問に対して最も多かったのが、教育の問題と貧困の問題を指摘するものであった。この二つの問題は、コロンビアにおいて密接に関連しており、貧困が原因で十分な教育を受けられず、その結果低所得を甘受せざるを得ないといういわゆる「貧困の連鎖」が見られる。また、コロンビアの労働市場を見ると、非正規就業の割合が六〇%近くあり、教育投資の限界効用は逡増する傾向がある。すなわ

ち、平均的な小学校卒業学歴の労働者の月収を基準とすると、中等学校卒は約二倍、大学教育や高等技術教育を受けた労働者は約七倍となっている。^(注)

(注) 前述のイングリッド・ベタンクルのジャングルから母親に宛てて書いた手紙(『ママンへの手紙』、新曜社、九九―一〇二頁)には、「私は苦しむのに疲れ果てました。苦痛を毎日自分の内に抱きかかえるのに疲れ果てました。」と心境を綴っているが、子どもたちには、「でも、博士号を必ず取るように、これは大事なことです。現在の社会で資格は、呼吸をするのにさえ必要なのです。(中略)ロリとメラがドクターを取るまで勉強を諦めないようにと、私はどこまでも言い続けます。メラ、いまからインターネットでハーバード、スタンフォード、イエールなどのサイトを見て、どんなドクター・コースがあるかを必ず見るように。」と米国の大学の大学院に是非とも行くように書いているのは、コロナピア社会で大学院を出ていることが如何に重要であるのかを物語っているように思われる。

この貧困を原因とする意見は、先に述べたように伝統的な通説的見解が根強く一般の知識人の固定観念として存在するという事実をよく物語っている。

次に多かった回答は、アルコール消費の問題と銃器の問題であった。これは、一般犯罪の傾向を説明する疫学的モデルにおいても指摘されているポイントである。

筆者は、北部のポリバル県の町サン・ハシントで毎年八月中旬に開催されるガイタという縦笛を用いた音楽祭に出かけたことがあった。夕方に始まり朝までコンテストが続けられる音楽祭であったが、聴衆はアグアルデイエンテという焼酎を飲みながら音楽に合わせて踊り続け一緒になってその雰囲気を楽しんでおり、日本の郡上八幡の盆踊りを思い出したものである。しかし、その際消費されたアグアルデイエンテの量は半端ではなく、貧しい地方の村でこんなにも大量に飲まれるのかと驚いたことを覚えている。

さらに、ある大学教授は、コロンビア人が従順であるからだという全く予想外の回答をした。その教授によれば、ビオレンシアが起こっているのは地方の農村部であるが、武力による抗争に駆り出されているのはほとんど学校教育を受けていない小作農民であり、地域のボス（大部分が大土地所有者）の命令に素直に従って武器をとって戦ったということだった。ガルシア・マルケスの『百年の孤独』にも描かれているが、武力抗争がいったん終結しても残党狩りが続けられたようで、これが農村という狭い社会では敗れた勢力に属していた兵士は住み続けることができず都市に流入することになったという現象をよく説明している。これは、大変魅力的な説明であったが、このような通説とは真逆の従順性という国民性を原因としている文献を見つけることはできなかったし、また、暴力性といっ

た抽象的議論と同じ問題点を含んでいるように思われる。むしろ、序章で説明したような郷党的親分—子分関係が強く影響していたと考える方が納得できる。

最後に、フランシスコ・サントス・カルデロン前副大統領は、明確にコロンビアのビオレンシアに関する固定観念の誤りを指摘し、本書を書く上で大変有意義なご示唆をいただいた。本書で主張したビオレンシアの基本構造は、同前副大統領に負うところが大きい。サントスは、エル・ティエンポ紙の元編集長で、麻薬問題に取り組み反メデジン・カルテルキャンペーンを展開したことから、一九九〇年にメデジン・カルテルのパブロ・エスコバルによって誘拐され、八カ月間ボゴタ市内で監禁生活を送った経験を持つ人である。^(注)

(注) サントスの誘拐事件については、ガルシア・マルケスが「誘拐の知らせ (Noticia de un secuestro)」というノンフィクション小説を書いている。

そして、私にとって最も参考になったのは本書に何度も引用しているエドゥアルド・ポサーダの『夢に見た国 (LA NACIÓN SOÑADA)』(二〇〇六年) を読んでみるようにと推薦していただいたことである。この本は、ポサーダが英国のオックスフォード大学に招かれて、歓迎晩餐会に出席した際、隣席の婦人から、「あなた方コロンビア人はあなたの国の麻薬でわれわれの若者を殺すのをいつになったら止めるのですか。」という敵意に満ちた

質問を最初に投げかけられ、その後次から次にコロンビアの問題をつきつけられた経験を踏まえ、コロンビア人に対してのみならず外国人にもコロンビアの真の姿を理解してもらう必要があるという動機で書かれており、私の問題意識には最適の本であった。この本がビオレンシアの問題を勉強する際の指針となり、本書の基礎となっている。

ここで、改めてコロンビアのビオレンシアにとり憑いている固定観念をいくつかの要素に分解し、これまで検討してきた事実を用いて固定観念の誤りを正すこと、すなわち「悪魔払い」を行っていくことにしたい。

第一は、コロンビアの過去ないし過去の政治は、絶え間ない激しい戦争または紛争の歴史であり、その本質が現在まで続いている。

第二は、これらの戦争または紛争は、コロンビア人の非寛容ないし暴力性から生じたものであり、国民性として引き続き存在している。

第三は、今日のコロンビアの犯罪率の高さは、コロンビア社会の貧困や格差といった経済社会構造の問題が原因である。

第一の論点については、スペインからの独立後一九世紀の内戦の性格を持つ政治的ビオ

レンシアはコロンビアにのみ生じたものではなく、旧スペイン植民地に共通したものである。また、その規模は、ディビッド・ブッシュネルの一九世紀に起こった八回のビオレンシアについて、「仮に（ビオレンシアの被害として）最大推計値をとって比較しても、一九世紀のコロンビアにおけるすべての内戦は、米国の内戦と比較して、絶対数においても相対数においても死者の発生が少なく」という指摘が客観的事実である (Posada, p.58) で Bushnell の *Politics and Violence in Nineteenth Century Colombia* を引用)。また、他のラテンアメリカ諸国と比較しても、決して多いとはいえない。ベネズエラは、大コロンビアから離脱後二五年間で一回反乱が起き、アルゼンチンの上院議員のオローニョは一八六八年に、「(一)の一〇年間で一一七回反乱があった」と嘆いている (Posada, p.54)。また、ラファエル・ヌニェスは、コロンビアよりメキシコ、中米、アルゼンチン、ペルー、ボリビアで内戦が長く続き、悲惨であったといっている (Posada, p.55)。最も内戦が少なかったといわれているチリでさえ、一八二九年、一八五一年、一八五九年および一八九一年と内戦が起こり、また、国境の資源をめぐり一八七九年、隣国のボリビア、ペルーと戦争をしている。チリのマリオ・ゴンゴラは、一九世紀は「戦争に彩られ」、チリは「戦争の国土」であったと述べている (Posada, p.55)。(一)のよびに、コロンビアの政治的ビオレンシアをコロン

ビアに特異な現象と捉えることは、歴史的事実として正しくないとと思われる。また、米国内戦、欧州の国際戦争や内戦と比較しても、その規模は小さい。

コロンビアの二〇世紀前半は戦争のない平穏な時期であり、メキシコの革命、二度の世界大戦、スペインの内戦、ドイツのナチズムとイタリアのファシズムなどと比較すれば、コロンビアは文明国家のなかで最も平和な国家であった。一九四八年四月九日のボゴタ騒動を契機に激化したラ・ビオレンシアは、コロンビアのビオレンシア史上最大規模のものであった。しかし、多くの本で「全国に波及した」と記述されていることから全国のすべての市町村において暴動が発生したように誤解されがちであるが、前述のとおり全市町村の一割強に当たる市町村が影響を受けたにすぎない。人口増にともない新たな入植地を求めて人々が未開拓の辺境地に移動していく動きのなかで、入植地の農地をめぐる争いが中心であり、このような入植の動きと無関係であったカリブ海沿岸地域や南部のナリーニョ県などでは、紛争は全く起きていない。また、紛争発生地において一年中武力抗争が継続していたわけではなく、短期間で終息したものもあり、その期間は様々であったことは留意する必要がある。この点について十分理解していないとコロンビアはビオレンシアがあるのに経済が安定しているのは奇跡だとか、コロンビアの謎」といった妙な見解が生ずる

ことになる。農村部を中心として生じたビオレンシアが、工業生産や商業活動に与える影響が極めて小さかったということである。

これらの政治的ビオレンシアは、二大政党による公職ポスト、経済的利権争いが基本にあったことが原因であり、国民戦線協定によりこれらの平等な配分が行われるようになって以降完全に終息した。また、一九九一年憲法により政党要件が緩和され、二大政党制が崩れて以降、政治的ビオレンシアの発生する条件がなくなった。

一九八〇年代後半から激化したゲリラ戦争、麻薬戦争は、コロンビアの治安を世界で最も悪い国のひとつにしたが、二〇〇二年から実施された民主的治安対策によりゲリラの勢力は次第に衰退してきており、著しい改善がみられる。

一般犯罪の状況は、コロンビアは政治的ビオレンシアやゲリラと麻薬要因を除けば、もともと犯罪の少ない国であったが、現在はゲリラと麻薬要因により過去の平和な時代の水準よりも高い水準になっているという現状分析を正しく認識する必要がある。また、現在は政府のゲリラ・麻薬対策という正しい処方箋により、一般犯罪が着実に低下傾向にあることおよびゲリラ・麻薬対策は今後とも粘り強く続けていく必要があることを認識することが重要である。

第二の論点についてはいえば、確かに歴史的にカトリック教会の位置づけをめぐり二大政党間で紛争が起きたことは事実であるが、世界の宗教をめぐる歴史を見ると非寛容ということは珍しいことではない。従って、この点をもってコロンビア人を非寛容と決めつけるべきではない。また、一五〇年近い二大政党制の歴史のなかで、投票による政党交代が平穩に行われてきた民主主義の伝統は、コロンビアが誇るべき美德であり、非寛容という性格づけとは相容れないように思われる。さらに、非寛容から暴力的性格を導く議論については、一般犯罪の実証研究において明らかのように、ゲリラと麻薬の存在という要因と司法制度の非効率性という要因が犯罪の高止まりを説明できる変数であって、争いごとを話し合いで解決する能力の欠如によって犯罪が起きているわけではない。科学的に犯罪の原因を特定できない時代に、コロンビア人の国民性といった曖昧な概念を持ち出してそれにより説明してきたコロンビアの知識人のもの見方については、ひとつはキューバ革命以降のマルクス・レーニン主義思想の影響、もうひとつは、自国の歴史の負の側面を自国の国民性に帰着させる自虐的思考方法を指摘したところである。

第四章の「一般犯罪の原因に関する通説的見解」で述べたように、ビオレンシアの文化とか暴力的な人種といった仮説には、科学的な裏付けがないとされていることは十分

に認識すべきである。むしろ、過去の歴史からは、警察組織が未整備時代のコロンビア人の平和性の方が印象的である。

第三の論点についていえば、ポサーダが最近の実証的研究を引用していないのが残念であるが、ラテンアメリカ諸国では一般的に貧困や格差の指標が犯罪をよく説明する変数であるのに、コロンビアではこの指標はあまり説明力を持たないという特殊性がある。コロンビアの貧困指標を見ると、世界銀行の基準（一日当たりの生活費二ドル以下）では一七・八%（二〇〇七年）であり、ブラジル、メキシコ、ペルーよりも若干低い水準であるが、コロンビアが独自に定めている家計消費バスケットの充足基準では、四六%が貧困に分類されている。また格差については、所得分配のジニ係数で見ると〇・五五三でブラジルとともに最も高い（格差が大きい）。一方、コロンビア人が現在の生活に満足している割合は九三・三%で、日本の七一・一%と比較しても高い。各種調査を比較してもコロンビアでは常に満足度が高い国にランクされている。これが、コロンビアにおいて、常識的に考えられる貧困と格差が犯罪を説明する要因とならない理由と考えられる。

ゲリラと麻薬組織の出現と存在が、貧困や格差から生じているのではないかという当然の疑問がありえようが、ゲリラの出現の背景として貧困問題があることは否めないものの、

直接的要因はグアテマラ、ボリビア、キューバで起きた共産主義革命の波の影響である。また、国民戦線協定のもとで、二大政党政治が国民のニーズを汲み取れなかったことも、もうひとつの原因であると考えられる。現在でも貧困状況は大きく改善しているとはいえないが、国民のゲリラに対する支持率は一〜二%にすぎず、また、多党化した現在でも左派政党が大きく議席を伸ばしている状況にはない。麻薬組織の存在は、その出現経緯に照らし貧困や格差から説明することはできない。

このように整理してみて、どこまで「悪魔払い」に成功したのか自信はないが、少なくともガルシア・マルケスが描いた虚像の問題点は理解していただけたと信ずる。

私は、第二章の四の「コロンビアの政治史の特質」において、一九世紀以降の自由主義と民主主義の伝統について述べたが、二〇一〇年の大統領選挙について、九つの政党が候補を立てて選挙戦を展開し、とくに大きな混乱なく粛々と投票が実施され新大統領が選出されたのに現地で立ち会って、この国の民主主義の成熟度を実感したところである。これを前ウリベ大統領が初当選した二〇〇二年と比べると、二月に大統領候補のイングリッド・ベタンクールと副大統領候補のクララ・ロペスがFARCにより誘拐され、四月にはウリベ大統領候補がテロ襲撃を受け、本人は助かったが三人死亡、二二人が負傷する事件

が起き、さらにすべての候補者に対する脅迫などが行われている。

このウリベ政権の八年間の民主的治安対策の努力の成果が着実に数字に反映され、国民の生活実感として評価されていることを日本でもっと知っていただきたい。なお、ウリベ前大統領は、自ら大統領三選に意欲を示していた大統領選挙前の時期に、二〇一一年以降の治安対策継続の財源調達のための増税法案を国会に提出して成立させている。八月の大統領の新任期が始まってからでも遅くない増税法案を、あえて六月二〇日の会期末までに手当てをしておき、あくまでも民主的治安対策を継続するという確固たる政治的意思を明確にしておくという姿勢には、頭の下がる思いがした。

図16(二三四頁)は、ウリベ政権成立後リーマンショックによる影響を受けながらも着実に殺人件数が減少している状況を示している。今後ゲリラ対策および麻薬対策の効果が浸透して、コロンビアが「悪魔払い」を必要としない、「夢に見た国」になることを願っている。